

---

# 修羅で生きる！

オラクル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

修羅で生きる！

### 【Nコード】

N9824P

### 【作者名】

オラクル

### 【あらすじ】

所々思い出せない記憶……

彼は記憶のピースを取り戻す為……

そして第二の人生を楽しむ為に……

仲間と共に動き出す……

## Prologueつというなもの(前書き)

初めましてオラクルです。

読むだけじゃ我慢できなくて書きちゃいました。

誤字が多いかも知れませんがよろしくお願いします。

更新は亀です。

## Prologue っていうなもの

..... why?

なぜ、俺は生きてるんだろう？

..... what?

そしてここは、どこ？

..... who?

そのネーチャンは誰？

周りは、全て白。

空も地面も全てが白。

その白ばかりの空間に、ひときわ目立つ金色な服を着たネーチャンが立っている。

「ちゃおっ」

「..... ども」

「..... つまらない反応ね。」

いやまてよ。

こちらとらいきなりの展開でテンパってるんだぜ？

いきなり面白い事しろっていう方がムズイわ。

「……………すみませんが、ここはどこで、貴女はだれですか？」

「君は君が死んだ瞬間っていうの覚えてる？」

あれ？

スルーですか？

「いえ、覚えていません。っていうか所々色々と思い出せないんですが？」

なんだこれは？

記憶の中に穴が空いてるみたいだ……

「……………そつか、それじゃ〜転生しよつか？」

またスルーかよ！

つーか転生！？

「ちよつと待てよ！ネーチャン！なんで転生なんだよ！つーか展開早過ぎだろ！」

「うつさいわね〜。ってか君の口調変わってるわよ？」

「そりゃ初対面には敬語使うだろ！そーじゃなくて、俺の質問に答えろ！」

「うーん企業秘密なんだけどいつか……君の記憶が所々覚えてないのは、死の衝撃が強かったからよ。」

……企業？つーか…

「……死の衝撃？」

「うーん、簡単に言うと刺激が強すぎて忘れてる状態ね。」

ちよい待てよ、つーとあれか？

「……俺の『死』って悲惨だったのか？」

「映像だせるけど……見る？」

「……いや辞めとく。」

自分が死んだ瞬間ってのには少し興味あるけど、忘れてる程の衝撃なんだろう？

だったら、忘れていた方がいいよな……。

無くした記憶は取り戻せばいいし…

「次いくわよ？」

「ああ……」

「転生の理由は、私を含め総勢13人いる神が君の死を哀れんだからよ。」

「……………同情かよ。つーか待てよ！神ってなんだよ！」

「あれ？言ってなかったっけ？私は神よ。私の名前はミネルバ。」

「……………マジで神様なんかいるのかよ。」

「あれ？信じるの？」

「……………俺は見た者は信じる主義なんだよ。」

「そうなんだ、なら転生してくれるわよね？」

「まあ、同情でも何でも第二の人生を歩めるなら行ってやるよ。」

「……………そう、ありがとう。あつ！ちなみに君の容姿だけど君が1番強く惹かれる者に近くなるから。」

「……………惹かれる者？」

「そう、惹かれる者。惹かれる者だったらどんな者にもなれるよ。」

ミネルバは、そう言う俺に手を翳した。

そして、暖かい光が俺を包む……………。

「お別れか……………。ミネルバ世話になったな。」

「いいのよ。君が死んだらまた会えるから。」

「縁起でもね〜（笑）」

「……………じゃあな。」

「うん！また死後にね♪」

俺を包む光がさらに強くなり、光で俺自身が見えなくなってくる。

さ〜て第二の人生をたのS『あつ！言つの忘れてたけど行く世界は『ロザバン』の世界だから♪』

「……………なんだと！？」

「そう言う大切な事は早く言えええええ……………」

そして俺は、光と共にきえていった。

神よ 死後に 殴るからな！

S i d e    ミネルバ

「そう言う大切な事は早く言え！つか……」

光と共にきていていった青年を送った後、私は一人呟いた。

「……相変わらず変わってなかったな。君は。」

ふふふ、でもこれで君は、また歩めるね。」

「……ありがとうね、神様。」

「うむ、確かに『彼』を送ったぞい。」

何もない真つ白な空間から一人の老人が、出て来た。

「しかし、よかったのかの？折角の転生の特権を『彼』に渡してしまつて？」

「良いんです。あれで……」

そう、元は私が『転生』する予定だったが、神様に頼んで『彼』に譲ったのだ。

「……私は『彼』に、返せない程の借りがありますから……」

私は『君』のおかげで救われたんだよ？

『世界』が変わる程に……

「……君達二人は、わしを含め12人の神の同情からどちらか一人を『転生』させようとしたんじゃないが……」

「そうですね……あっ！やっぱり勝手に神様って名のちゃんバかったですか？」あの時は勢いで言っちゃったんだよね」

「ふおおおお、神は皆、寛大じゃよ。」

「よかつた」

名乗っただけで『地獄行き』って言われたらシャレになんないもんね

「…………ふむ。」

……………暫し待て。お主も送ってやるぞい。」

「……………え？」

「少し輪廻が狂うが、問題なからう。」

え、え、ええええ！

「それって神様！」

「だから暫し待て。今は、まだその時ではない。  
時が来るまでは働いて貰うぞ?.....ミネルバよ」

「は、はい!」

.....よかった。

また会えるんだ『君』と.....

「ふふふ」

「行くぞい。ミネルバ」

「はい」

会えるのが『死後』じゃなくなったね」

## 主人公Profile

フォルカ・アルバーク

身長：180cm

体重：65kg

誕生日：不明

星座：不明

趣味：特になし

好きな言葉：Love&amp;piece

嫌いなもの：敵・傲慢

正体：新種？人間？

容姿：

スパロボのフォルカまんま

性格：

芯が強く、護れる者は守る主義。

Love&amp;pieceを心掛けているがLoveに疎く、  
LoveをLikeぐらいにしか思っていない。

前世：

記憶を無くしてる為、前世の自分の名前がわからない。  
家族や幼なじみ、友達に囲まれて普通に過ごしていたが、ある日を  
堺に彼の人生が崩壊。

幼なじみと一緒に最後まで足掻いたが、数多の人と共に死亡。

目標：

第二の人生を楽しく過ごす。

ミネルバ

前世：

『君』の関係者。

職業：

偽神↓神様秘書

性格：

自由奔放なオタク。

好きな事：

ゲーム・アニメ鑑賞

悪戯・コスプレ・巻き込み

## 第一章・壱

——陽海学園

人間いなく、いるのは全て妖怪のみ。

その人入禁止地帯に、青年は降り立った。

——修羅の心を宿して…

——第一章・壱——

ここは何処？私は誰？

S i d e 君

光が止み、光の性で失っていた視力が戻るとそこは………廃墟だった。

「……………ちよつとまてええええい！」

なんだよ！

その『トンネルの先は雪国だった』的な感じは！？

せめて廃墟じゃなく絶景にしてくれよ……

「……………しかし、あれだな。これは転生っていうのか？」

そう、今の俺は転生小説によくある赤ん坊スタートではなく、二本足で立っている。

「憑依？いや違うな。ん？これは？」

何か手がかりを探し、ポケットなど漁っていると上着から手紙が出て来たのだ。

「………… from ミネルバ」

……………ミネルバからだ。

親愛なる君へ

今の君は自分の状態がわかっているかな？

わかってねーよ……

君は、この『世界』に生み出された存在。

……新種だね♪

俺は動物かなんかか？

君の事を説明すると長いから大切な所だけ説明するね♪

いや、説明してくれ……

君の右手に指輪があるでしょ？

それは私と君を繋ぐ物だから外さないように！

お！？なんかついてる！

俺の右指に銀色のゴツい指輪がはまっていた。

その指輪は転送装置で、私とその指輪をとっして贈り物するから♪

……世話になりっぱなしだな。

ついでに君から私にも贈れるからプレゼント楽しみにしてます♪

……そっちが目的だな。

使い方は指輪に触れるだけ♪  
最初の贈り物は、もう届いてるから♪

なるほどな……

指示通り指輪に触れようとした時、手紙の裏に小さく書かれた文字を見つけた。

P・S・

……死なないでね。

「……………当たり前だ。」

……………死後に会おうって言ってたのに死ぬな！つか。

苦笑をこぼしながら、指輪に触れると指輪が光だし、俺を包んだ…

……

そして、俺の姿は……………

「…フォルカ・アルバーク」

目の前の鏡に写った自身は、とあるゲームに出る拳法家に似た者だった。

……………惹かれる者ってそういう意味なのか？

確かに、アイツがプレーしてる所を『ヤルタバオトかけえな』  
って見てたけど……………

ってアイツって誰だ？

「……………まあ、調度いいからフォルカと名乗るか。」

まあ…この『世界』に本物はいないんだからいいよな。

……さてと

「いい加減出て来たらどうだ？」

「……何時から気付いていたんだい？」

「……最初からだ」

廃墟の中からフードみたいの？に身を包んだ男が出て来た。

「……君は何者だい？いきなり姿が変わったが、そういう妖怪なのかい？」

そうなんだよ。

コイツに姿が変わる所を見られてるんだよね……

まあここは、流しとして現状を把握しなくては……

「……そんなもんだ。俺も一つ聞きたいのだが、ここはどこだ？」

「……おかしい事を言う、ここは陽海学園の学生寮だよ。しかし君みたいな学生は見た時ないね。」

もう一度聞こうか

……………君は何者だい？」

うわぁ〜メツチャ怪しまれてるよ。

いきなり『転生？してきました！』って言っても信じないな〜これは……

「……………」

「…………だんまりか。ならそれなりの対象をさせてもらっよう？」

そう言くとフード男は十字架を掲げ、何か唱えはじめた。

そして、俺を中心に魔法陣みたいな文字が浮かび、球体が俺を閉じ込めた。

「…………これは！？」

「『結界』だ。暫くは、そこにいてもらっよう？」

そして、そこから立ち去ろうと歩み始めた。

……………って解説してる場合か！

折角の情報源が逃げてしまっよう！

取り合えず、軽く『結界』とやらを殴ってみたが、歪む程度で壊れない。

「！……………君の対処は考える必要があるね。」

……………マジかよ。

第二の人生も捕まりオシャンになるのかよ

クソ！俺に力があれば……

あの時だってアイツを助ける事が出来たのに！

自分の無力さに苛立ち地面を殴りまくる

……………その時であつた。

指輪が光だし、俺の頭に聞き覚えのある声が届いたのは……………

式

修羅となりし青年は新たな地で動き出す……

何が起ころうが修羅は…

——自らの拳で道を作る

——第一章・式——

YES！学生ライフ！

え……今夏休み！？

——学園室

Side フォルカ

両サイドに蝋燭が燈され、薄暗い部屋の中……

「……という訳だから、よろしく頼むね?」

「ああ、任せてくれ。」

フォルカと理事長は握手を交わしていた。

YES！交渉成立！

これで俺の立場は安定したぜ！

ん？

なぜ握手してるかって？

誤解は解けば解決するのさ！

p p p p ……

p p p p p ……ガチャ

「私だが？………応援？そうか『魔女の丘』の魔女が動くか………あ  
送れるよ。………という訳だ。至急『人間界』にある『魔女の丘』  
へ行ってくれ。」

なにが「という訳だ」だ！

「説明がほしいが………わかった向かうとしよう。」

まあ、契約だから仕方がない、か………

「早々悪いねえ。案内は私のバイクに任せてくれ。」

「………感謝する。」

「つか理事長がバイクとか無いだろ……」。

「……はあ」

「では、行ってくる。」

そして俺は理事長室を出た。

Side 御子神

「……さて、彼はどのように動くかね……」

「ヒヒ……随分彼を信頼しているんだね？」

「……彼は、いい目をしてた。それにちゃんと芯が通っていたよ。」

「ヒヒ……お気に入りをお大勢の軍隊に送り出すとはね……正気かい？」

「彼なら大丈夫さ。」

なにせ、私の結界を破壊しまくったんだからね……

——三時間前

「……これは!？」

「『結界』だ。暫くは、そこにいてもらうよ?」

——時は、御子神が仕事の息抜きに、辺りを散歩している中、不審者を見付け、拘束した時から始まる。

さて、仕事に戻ろうかね

——そう、私は学園に時々忍び込む輩を何時もの様に拘束していた。あの時は『人でがほしいね』と思いながら軽い気持ちで帰ろうとしていた。

……あの事を見るまでは。

ゴン!と結界を殴る音が聞こえたので、軽い気持ちで振り返り彼を見た。

「!」

結界が歪み今にも消えそうになっていたのだ。

私は、急ぎ結界を強化した。

……『審判の十字架』で張った結界が一撃で消滅しそうになるとは

……

「君の対処には考える必要があるね。」

そう言った瞬間、彼の眼は『絶望』へと変わった。

——今思うとあの言葉を撤回しなかったね。

彼は狂った様に地面を殴り始めた。

あの時彼は、殺されると思ったんだろうね。

しかし、彼の動きがピタリと止まってから彼は変わった。

いきなり光始め、光が収まると彼の眼は『絶望』から『希望』へと変わっていたのだから。

「……………俺は生きる！」

彼は何らかの構えをとった。

すると彼を中心に爆発的な力の本流が始まったのだ。

私は慌て、結界の上にさらなる結界を施した。

しかし、彼は「機神拳！」と言った後に蹴りと拳を結界に連打し始めたのだ。

拳一つ蹴り一つで次々と何重に張った結界が破壊されていく。

私は危機を感じ『北都くん』を閉じ込める為の結界を彼に使ったが、「空円脚！」と回し蹴りを放たれ全ての結界が破壊されてしまった。そしてあるのは、私の目の前に止まる彼の拳。

——あの時は流石の私も自信を無くしたね。

……彼は問う

「貴方は俺を殺すか？」

私は答える

「殺しはしない。ただその力を貸してほしいのだよ。」と

そして話し合いの結果。

三大魔王と修羅の戦いは終わったのだ。

——三時間後

『ヒヒ……大丈夫か。』

「それより、『あいつ』を行かせる様にしといてくれ。」

『ヒヒ……少年は動くさ』

ツーツーツー……

そう、『あいつ』には、これから働いて貰わなければな……………

そう月音くんには……

御子神は、思いに浸りながらも空を眺めるのであった。

参

魔女と人間の間の溝はとてつもなく深い……

思いと思いが重なる中……

修羅はある人の面影を見る……

——幼なじみの影を……

——第一章・参——

戦う

↓ 守る

道具

逃げる

フォルカは守り始めた。

魔女の丘

Side フォルカ

ん！電波を感じた！

なぐにが「眺めるのであった」だ！

こっちは

ゴミ山だぞ！

理事長からバイクを借り走らせる事、数十分目的地の『魔女の丘』  
についたのだが……

……向日葵畑（妖怪畑）からゴミ山に一瞬で場所が変わったの  
だ。

流石『ロザバン』何でもありか〜っと思っていたら

いきなり土下座してますよ。

おい、青年？少年？よ  
君ってそういう趣味か？

しかも、揉めてる最中にも、小娘が人質になってんぞ？

本当『戦闘』をしらないな。

……傍観は終にして、仕事するか。

契約は守らなくてはな…

……もう少し近付いて話が聴こえる所まで近付い 「罰には罰を  
まずはこの女に死んでもらおう」 聴こえたが、穏やかじゃな  
いな。

会話が聴こえる範囲まで近付き、ゴミン山に身を隠した。

「——やめるなよ!？」  
そのままじつと見ている！

それが出来たら街を襲う計画は考え直してやってもいいぞ!？」

………傲慢してるな。  
上手く行けばアイツだけ殺れる。

だが、今は動く時じゃないな……

「大切なものが奪われる苦しみ……  
お前も味わうがいいッ!」

………ドクン

「たいせつな、もの？」

.....ドックン

.....ドックン

.....ドックン

.....

.....

...

「反政府軍リーダー

よ！貴様の大切なものを奪ってやるよ！」

...

.....

.....

.....

.....

.....ドックン！

はっ！これは俺の記憶！？

俺の大切な者は幼なじみの『ち』.....

違う！今は仕事に集中しなくては！

.....ドックン！

くっそ！

「心配しないで...」

！？

「どんな過去があつたって本当は皆仲良くできた方が幸せに決まってる」

……………ドックン！

「私も

くるむちゃんも

紫ちゃんも　そして」

瑠妃さんも

皆　つくねにそれを教えてもらつたんだよ」

……………ドックン！

『「つくね（あきら）は間違つてなんかいない」』

……………ドックン！

『「私はどうなつてもつくね（あきら）を信じてるよ」』

ドックン！――！

……………この言葉は――？

そうアイツ……………

『千鳥』が政府軍に捕まつた時、言っていた……………

「…チッ こいつ……命<sup>いのち</sup>ごいしそうな女を選んだつもりだったが…  
クソが…」

…ドクン！

そうだ！俺は『千鳥』と共に戦って……

「だったら望み通り死ねエエ！」

！？

ドクン！……！！

「「やめろ——！！！」」

俺は遅れながらも飛び出した。

目標は、ただ一つ。

少女の奪還のみ！

——優しき修羅は新たな戦地へと、いざ参らん！

Side 三人称

月音は、走り出した。

しかし、ハナバケに道を遮られてモ力諸ともハナバケの餌食になってしまった。

くるむは、泣き叫び

紫と瑠妃は絶望感を感じていた………が

「「「ギヤアアアア！」」」

ハナバケの中から二つ、妖気と妖気とは違う力が沸き上がったのだ。

「モ…モ力…さん」

意識が放浪してるがモ力の安否を心配する月音。

「このバカめ…」

相変わらず人間のくせに無茶をする………だか

おかげで助かったよ月音。………そして貴様もな。」

モ力は、月音に呆れながらも礼を述べ、警戒しながらも自分の前に立つ男に礼をいった。

「……なに、礼を述べるのは俺の方だ。おかげで大切な人の名を思い出せた。」

「……………フン。」

今ここに『原作』と『イレギュラー』が合わさりあつ。

#### 四（前書き）

地震凄かった

そして、本文がめっちゃくちゃ……

文才がほしいよ。

駄文で申し訳ありません。

## 四

……イレギュラー。

本来ある原作を破壊し、あるべき道を反らしてしまう存在……

イレギュラーたる修羅は新たな道を作り出す。

——修羅道を……

——第一章・死——

あれ？

俺ってニュータイプ？

魔女の丘Side フォルカ

「……………貴様何者だ？」

ですね〜

気付いたら美少女と青年助けてたし…

今更、お邪魔しました。

失礼します〜。

………は、無いよな。

はあ〜、仕方ない。

「……俺の名は、フォルカ。学園がra「スキアリだ。」の……」

ズドオオオオン!!!!!!

……ちょっと待てえええ!

人が自己紹介している途中に蹴りいれるなよ!

「オマエは『和解より血を』を望んでいるんだろ?

……私も『和解より血を』望んでいる。」

「……ナメるな小娘が

私を本気にさせたこと…  
後悔させてやろう。」

立ち上がり吠える魔女。

睨み返す美少女。

そして空気の俺。

…………泣いていいか？

俺が自分の存在に心で泣いている間にも事は進んでいく。

「ダメエ——ッ！

お館様！まさか、あの魔法をッ……」

まばゆい光が当たりを照らし大量の妖が魔女を中心に一つになっていく。

「…………るび

私はもう……

今さら後には退けないのだ。

…………私は人間を憎む！

私は人間を殺す町を滅ぼす！

私は人間に復讐するッ！」

一つになった妖が逃げる青年達を腕？を振り下げ攻撃を仕掛ける。

…………って暢気に解説してる場合か！

俺は足に力を込め、その場を離脱した。

…………しかし、人間への復讐か…………

S i d e 三人称

モ力に対し、己が持つ究極魔法『妖魔合身』で迎え撃つお館。

その強さは、仲間内では無敵と 言われるモ力を追い詰める程のも  
のだった。

更なる吸収をする為に、モ力にツルをむける。

しかし、るびが身を犠牲にしてモ力を守った。

満身創痍の中、若き魔女の思いはただひとつ……

また二人で静かに暮らすこと……

その願いを……

「月音さんモ力さん……

お願い……い 止めて……

お館様を……止め……て……」

……ではなく

「ああ……俺が止めてやる。」

……紅の修羅が受け入れた。

S i d e フォルカ

傷つけられてなお、お館の身をあんじるか……

「……るび」

この二人は『復讐』と言う名の鎖に繋がってしまったのだな……

「るびいいイイツ！！！」

若き魔女は、気づき、もう一人を助けだそうとしたのに……

「……バカなヤツメ。」

巨大な妖は、俺と魔女を喰らった。

「……その『復讐』の連鎖。……俺が断ち切る。」

S i d e モカ

「た…食べた！？」

「瑠妃さんを助けた人も食べられちゃいましたあ！」

「何なのよアイツ！」

仲間であつた瑠妃を喰らつたお館に驚愕する月音達。  
しかし、モ力は違和感を感じていた。

（……おかしい。私の時みたいに奴の力が上がっていない……何故？）

「ああ…漲る お前の！？」  
何故！瑠妃の魔力が流れない！？」

（奴の言う通りだ…。  
疑問があるが私がする事は一つ……）

「……哀れだな」

「！」

「……瑠妃はお前を止めるために命を懸けたのに…  
だか、もはやお前の負けだ。  
瑠妃の想い……  
私が代わりに届けてやろう。」

「ほざけえ」「いやその役目は俺がやる。」「……！」

奴の言葉を遮り、澄んだ声が聴こえたと思ったら、声の持ち主が奴の口を、片腕でこじ開け出てきたのだ。

「貴様は！何故生きている！」

「……この魔女の願いを聞き届ける為…俺は死なん！ハアアアア！  
覇アー！！！」

掛け声と共に力の本流が妖の口で暴れだす。

「ッ！」

力に耐えられず、お館は吐き出す形で瑠妃達を解放した。

そして男は瑠妃と共に私の目の前まで降りて…

「……彼女を頼む。」

そして瑠妃を私に託した。

「…お前は何者だ？」

本能が言っている……

「俺は…」

コイツは、私と同等の…

「修羅だ。」

強者だと………

Side フォルカ

さあ、フィナーレだ…

「さあ魔女よ。決着を付けよう。」

「……………」

『復讐』なぞする愚か者を止める為の…

「貴様が『復讐』をするかぎり……………」

「……………け」

二人に新たな道を示すための…

「我が拳がお前を打ち砕く！」

「ほざけええエエ！！！」

大量のツルが俺に襲い掛かるが……

「我が覇気を受けよ！」

俺の覇気から作られた双覇龍がツルを断ち切り、止まる事なく、お館の魔具を貫いた。

「機神双獣撃！！！」

「……………ああ……」

魔具を中心に妖にヒビが入り初め光りだす。

「！……！」

「きあああ！！？何コレー！」

「まつまさか これはっ……」

危険ですう！もっと離れてください！」

「！？」

「あの巨体は沢山の妖の寄せ集めだから魔力の支えを失えば自己崩壊して『破裂』しちゃうのかも……」

……………だろっとな  
しかし……

「それだと二人は救われない……」

「ッ！あ、あんたも速く逃げなさいよ！」

「……………アイツ（千鳥）の言葉だ。」

「……………え？」

そう……

無理難題に直面しても…

「そんな通理……

我が無理（拳）で切り開く！」

……少し違うけどな（笑）

だけど、この言葉で俺達（反政府軍）は戦って来れた……

「ちよと何いって「ハアアアア！！！！！」

ッ！ キヤアー！」

俺の覇気で、外野（月音達）が吹き飛ぶが…

………関係ない！！！！

「覇ア！」

一瞬にして妖の懐に入り込み……

「雄李ヤ！」

最初の一撃で……を抜きちぎり……

「雄雄雄雄雄雄雄雄ッ！」

地面と一体化している妖を我が連撃で切り離し…

「でやああ!!!!」

会心のアッパーで打ち上げ……

「いでよ!!!!覇龍!!!!」

双獣撃より遥かに強大な覇気で作りし覇龍が妖を貫き……爆発した。

「轟覇!!機神拳!!!!」

空での爆発……

爆風と爆発光が照らしたすのは……

「そつだよな……千鳥。」

「……………」

……優しき修羅と魔女の丘の主だった。

## 第一章・終演

修羅は貫いた。

自身が信じるままに…

しかし、それはまだ序曲に過ぎない……

この長い演奏会で修羅はどのように奏でるのか……

まだ修羅は知らない

## 第一章・終演

はあゝ…眠い……

## 魔女の丘

S i d e    月音

「……………瑠妃さん」

あの長かった夜が明け、朝日が出て来ていた……

「力になりたかったのに、何も してあげられなかった…オレには何も……………」

妖怪と人間の共存を願っていたのに、僕は……

「……………月音さん」

「月音……………」

「月音……………お前はよくやったよ。お前が頑張っていなければ瑠妃も死んでいただろう。」

「モ力さん……………」

でも、僕はお館様にも生きて欲しかったし……

あのお館様を倒した人もいなくなってしまった……

「僕は本当に二人をt a」……青年よ」　　！え！？」

思いを巡らせている中、木々からお館様を倒したあの人が出てきたのだ。

「「「「！！！」」」」

「思いが伝わらなければ、何度でも試すがいい。  
……その時間はあるのだからな。」

そう言うと、僕達にわかる様に背を向けた。

「ッ！お館様！」

「「ええ！」」

「……………」

あの人の背中には死んだと思っていたお館様がいたのだ。

「……かなり強引に助け出した。……暫くは、その魔女と一緒に療養が必要だがな。」

「よかった。……ありがとうございます！」

そくだ…生きていれば何度でも話し会う機会はあるんだ！

みんながお館様の所に近付こうとした時……

「月音、まだ行くな…」

「…………え？」

モカさんに遮られてしまった。

「奴は不信な事が多すぎる。何故都合よくあの場にいたのか？あの力はなんだ？そして…………人間である貴様が何故妖怪を助ける。」

「「「ええ！！！」」」

「……………」

に、人間！？

あのモカさんさえ、苦戦した妖を倒した人が…………

「奴は、お館の仲間なのかもしれない。再起を果たす為、演技している可能だつてある。」

「「「……………」」」

十分に有り得る事だけど、あんなに人間を嫌っていたお館様の仲間？

…………

「…………大丈夫だよモカさん。」

「月音！？」

僕はモカさんの前に出て、あの人の眼を見ながら言った。

「あの人は、そんな人じゃないよ。そんな事を思う人があんなに必死に命を助けたりしないよ。」

「月音……」

「そうでしょ？」

「……ふ、面白い奴だ。」

！？

笑われた！？

お互いの警戒がとけ、和やか雰囲気になった時、見覚えのあるバスと車が近付いてきた。

「……ごめんね、遅くなっちゃって  
みんないろいろ大変だったみたいね。」

車から降りたのは、僕達の担任……

「猫目先生！」

今更登場ですか！  
じゃなくて！

「先生！二人を速く治療したいんですが……」

そう二人を速く治療しなきゃ！

「焦らんとて大丈夫やで。

医療器具は乗ってる。

大丈夫や。」

「ギン先輩？何でここに――…」

学園で補習だったはずだけど？

ギン先輩の存在について考えていると…

ブオオオオン！！！！

一台のバイクと共にあの人は、行ってしまった。

「何者だったんだろう……」

あの人？」

「ヒヒ……気になるかい？」

「はい……」

「ヒヒ……そう焦らなくても彼はすぐ現れるさ……すぐにね。」

「？」

僕は、その時バスの運転手が言っていた事が本当になるとは思わなかった……

「転校生を紹介します！  
どぞぞぞ」

「……………フォルカ・アルバーグです。よろしく。」



## 第二章・Prologue

俺は戦った……

最初は、ダチを助けるためだった……

ダチ達は、世界を変えるために戦っていた……

確かにアイツ等は世界を変えて言った……

しかし俺は……

屍を築き上げるだけ……

俺はアイツ等の役に立てたのか……

……

……

……

……

……辞めよう

考えるのは似合わないな……

「……………あ……………る！」

とりあえず……………

「アクセル、アクセル。」

この五月蠅い幼なじみを静めるか……………

「アクセル…面白い奴がいる…青葉月音っていうんだ。」

「……………また変な野郎じゃなかるうな？」

「大丈夫だ。危ない時はアクセルが助けてくれる。」

「……………言うようになったじゃないか？……………ああ、俺が助けてやるさ、俺の命をかけて……………これがな。」

さあて、第二の人生を楽しもうか

???

Side ミネルバ

「神様〜神様〜……………うおい！ジジ〜！起きろ〜！」

まったく！

仕事中に寝やがって〜！

「ほお！……………ミネルバよ。

もちつと優しく起こしてくれんかの？」

「起こしましたよ？それよりこの『転成者リスト』にサインください！」

「わかつとるわい、わかつとるわい。」

慣れた感じでサインを書いていく神様。

でも最近思っただけど……

「……ねえ神様？『転成者』ってコンナに決めるのって大変なの？」

「ふお？これぐらい当たり前じゃぞ？」

何行ってるの？こいつ……って顔してるけどね〜

適性検査・一次面接・SPIテスト・体力検査等など  
108のテストをクリアした人だけが『転成』できるらしい。

中には「牛乳を鼻から飲め！」みたいな馬鹿な物から「神様をほめなさい」みたいな自己満足の物……

難関なのが「畳の目を一分以内に数えなさい」みたいな無謀な物まで……

『転成者』っていないんじゃないのかな？

今持ってきたリストも不合格者の扱い方についての書類だし……

「……ねえ神様？『転成』した人っているの？」

「ふおふおふお〜いるぞ〜」…… 1人だけ。」

「……凄いですね。その人は今どこに？」

私なら1997年ヒットソングメドレーを歌いきれ！でoutだわ

「おお、確か……ミネルバの思い人と同じ世界にいるの」「ええ！  
！」……名は？そうじゃ！ 穴戸 城「ええええええええええ！！！」

……ってミネルバよ、五月蠅いぞい？」

「す、すみません！でも本当にジョーなんですか！？」

「なんぞい？知り合いかの？」

「私達の戦友です！！！！」

ジョーが生きてる！

しかも、君……あきらと同じ世界で……！！

「フフフ♪神様！私はまだ転成しないの〜！」

「……まっとな！まだ時間が掛かるのじゃ！」

そんなに怒鳴つても今の私は……

阿修羅さえ……いや違う！

神様さえも凌駕する存在だ！

食らえ！必殺！

「お・ね・が・い…か・み・さ・ま」

涙目＋上目遣い＋甘い声！

この三連コンボを喰らえば！

「至急『転成者』の空きを作るのじゃ！何！？空きが出るまで時間が掛かるじゃと…！！知るかボケエ…！！はよせんかい！後1時間以内にしなければテメエの給料から…！！…！！…！！」

す、凄いわね……

でも会えるまで、時間は掛からないみたいだね♪

待っててね！

あきら！ジョー！

## 休憩時間・壺

教室

Side フォルカ

「転校生を紹介しまゝす。どゝぞ〜」

「……………フォルカ・アルバーグです。よろしく。」

……………大勢の前に立つのは、軍の士気を高める為にやった演説以来だなあ。

まあ、あの時と違って重みはないけど……………

なぜか！

教室の沈黙がイタい！

無難に挨拶したつもりだが？

「ん〜…フォルカ君？それだけ？」

「……………それだけ？とは」

「普通は、もつと以前住んでた時の事とか話す感じなんだけど…？」

「……………いえ、俺からは以上です。」

以前住んでた所とか、無いし…

下手して面倒事になったらいやだしな

でも

クラスからの沈黙がイタイ！

「んゝん！それじゃあゝフォルカ君に質問がある人ゝ」

……無理があるだろう

ついさっきまで、他人だった奴に興味持つや…

んな！？

クラスの大半が手を挙げてやがる！？

「それじゃゝいつてみよゝ」

……拒否権はなさそうだな。

「趣味はなんですかゝ？」

「……特に無い。」

「誕生日はゝ？」

「……わからない。」

「本当に高校生？」

「……ではなくてここにいない。」

「好きなタイプは？」

「……教える必要がない。」

「……部活は何かやりますか？」

「……考えていない。」

「……何の妖怪ですか？」

「……校則でいえない。」

「……」

「……」

殆ど答えられていないな。

案の定、みんな手を下げ始めたし……

答えられないから仕方がないじゃん！

ん？アイツは……

「困ったね、他に質問がある人h a！ 月音くんどうぞ」

「……溝は埋める事が出来ると思いますか？」

！？ こいつ……

「ああ、諦める事をしなければな…」

クラスの殆どが分かっているが、俺達の間では分かる。

人と妖の溝は埋められる。

こいつは、その希望だな。

「？ 取り合えず質問は終わりで、フォルカ君は月音くんの後ろの席に座ってください」

「先生！その席は空いてませんよ？」

「知ってるわよ。フォルカ君の机を用意するの忘れちゃったから病欠の首長さんの席に今は座って貰います。」

……忘れんなよ担任。

内心愚痴をこぼしながら席へと座った。

「フォルカ君この間ありがとう。僕は青野月音。これからよろしく。」

青：月音が体を傾け話しかけてきた。

「ふ、フォルカでいい。お前とは仲良く出来そうだ、よろしく頼む。」

ありがとう、か……

この世界に来て初めて言われたな。

どうなるか知らないが二回目の学生生活を楽しむとするかな……

「次に二学期のクラスのリー………」

取り合えず………

………寝るか。

## 第二章・弐

——雪と月——

二人の対面に……………

——修羅と闘士——

二つのイレギュラーが混ざり合う……………

紅の修羅は、蒼き闘士に何を思うか……………

——まだ彼等は知らない

## 第二章・弐

俺にもストーカーが……………

廊下

S i d e フォルカ

「学級委員長おめでとう！  
つくね！」

…おう、寝起きの俺には眩しい笑顔だぜ。

なんかシランが

起きたら時間がたっていた。

っーか誰か起こせよ…

「だからやんないって！委員長は明日 もう一回決めようって  
煩いぞ 月音。」 ってフォルカも何か言ってるよ！」

…… 確か原作は月音が委員長じゃなきゃ進まないよなあ

うる覚えだから曖昧だな…

「何事も経験だ。 それに向いていると思うぞ？」

「そうでしょ！私も つくねでいいと思うけどな学級委員長」

「ちょっと待ってよ二人共！」

「「？」」

「二人共 基本を忘れていない？ 俺は この『妖の学園』でたった一人の人間なんだよ？」

「…月音 俺も人間だが？」

「フォルカは別だよ！」

……なんか思いつ切り否定されたな。

確かに新種みたいな人間ってミネルバが言っていたが悲しいような

……

「……だから委員長なんて目立つ事 絶対できないよ」

……ってかまだ話してたのか月音。

「んー……」

「どうしたモカ？」

「ねえ それよりお菓子を買いにいこーよ！ 今日のウチアゲで食べるお菓子。」

ビキィ！

……月音 哀れだな。

まともに取り合って貰えないとは。

「……！ モカさん！聞いてくれよ 人がマジメに話してんのに……」

「大丈夫だよ つくねなら」

「そんな無責任な！」

っーかこの痴話喧嘩聞く俺の身にもなれ 二人共…

廊下↓売店

「うーん…」

「どうしたんだモカ？」

月音が怒ってドコカへ行ってしまったので、モカについて来たが……

「何であんなに怒ってちゃたんだろう つくね…」

まださっきの痴話喧嘩について考えてるよ…

……まったく。

「……月音は、人間だとバレない様に目立った位置に付きたくない。その気持ちをモカなら理解してくれる。っと思ったんじゃないか？」

「……少しは気持ちが晴れると思ってお菓子の買いに誘ったつもりなんだけど。」

「まあ、裏目に出てしまったな。」

「つくねのバカ……」

……モカの機嫌をとる俺の身にもなってほしいものだ。

「……なに、次に会った時にでも」「ちょっと やめて引っ張らないで白雪さん」！？」

「フォルカこつち！」

月音の声が聞こえ反射的にモカと隠れてしまったが……

女と一緒に売店にやって来る月音。

俺がナイスアドバイスをしようとしてるのに女を引っ付けて来るとは……

いい度胸してんな月音！

「あの子はさっきの……」

「知っているのか？」

まあ、フラグメーカー月音が連れてくるんだ。  
原作キャラだろうな……

「うん…朝新聞を配っていた時に男の子と一緒に貰いに来た子なんだけど…」

男の子？ フラグメーカーの月音に男と関わりがあったっけ？

「……ねえフォルカ」

「なんだ？」

「盗聴とか読唇術って出来る？」

「……モカ、お前まで人外に扱うか……」

妖怪に人外扱いってこたえるな……

しかし、男か……

少し注意した方がいいかもな……

その後、月音達を見送った俺はモカに先に行かせ、謎の男について調べようと動いたが……

一組に停学をくらった学生がいる。

その学生は先生に怪我させた。

紫髪で長身。

などの情報しか手に入らなかった。しかし、俺の勘では、そいつが当たり前だな。

このファンタジーな世界で停学とかないしな……

俺が考えている中……

パキアアン

と何かが割れるような音が響いた。

ッ！ 確か原作にモ力が襲われる所があったハズ！

嫌な感じがし、音が聞こえた教室へ向かいドアを開けた瞬間！

バギ！

水色髪のきよ… 女が、さっきの女の頭を砕いていた！

「……………殺人か？」

「違うわよ！ってかアンタは！」

「人間界で助けてくれた人ですう！」

「フォルカ！」

「なにモカ！知り合い？」

「今日転校してきたフォルカ・アルバーク君。驚いたよね、いきな

り転校してくるんだもん。」

「本当ですか！私は仙童紫ですう。あの時はありがとうございますう。」

「私は黒乃胡夢。くるむ でいいわよ。」

「フォルカだ。……しかし呑気にしていいのか？さっきの奴の本体が見当たらないが……」

「そうだった！つくねが危ない！いかなきゃ！」

本当にマイペースだなモカ……

「でも何処にいるかわからないですう。」

「モカあんた何とかしなさいよ！」

「く、くるむちゃん無理言わないでよ！」

……おいおい、仲間内で喧嘩かよ。

……仕方ないな。

「取り合えず校舎をでて」……教えようか居場所を「ッ！」

「」「！」「」

皆が声の主がする方に向くと、そこには紫髪の長身で黒のタンクトップを着た……

この世界ではいるハズのない人物が立っていた……

「……アクセル・アルマー。」

……今、紅の修羅と蒼き闘士が会つ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9824p/>

---

修羅で生きる！

2011年11月16日11時16分発行